

営農情報

令和4年5月18日発行
第14号

当管内の秋小麦圃場で【小麦縞萎縮病^{しまいしゆく}】の発生が 確認されております

○小麦縞萎縮病とは・・・

- ・ 土壌伝染性のウイルス病であり、病原ウイルスは種子伝染はせず、土壌中に生息するカビの一種によって媒介され、高い伝染力があります。
- ・ 病原ウイルスに汚染された土壌は、10年以上も病原性を維持するため、難防除病害の一つとされています。

○発生圃場の特徴

- ・ 発生症状は、多くの場合スポット状に黄化し、葉は黄緑色のかすり状になり、株は萎縮し、草丈が低く、分けつは不良となります。雪腐病、湿害による生育不良の症状とよく似ています。また、生育が進むにつれ病徴が不鮮明となることから、現在の圃場をよく観察し確認しましょう。

○多発条件

- ・ 秋季が長く高温に経過し、春季が低温に経過すると発生症状が激しくなります。
- ・ 極端な早期播種や排水不良、連作、※高 pH (pH6.0以上) であるほど菌が蔓延しやすいとされています。
※但し、畑作に必要とされている pH5.5 は最低限維持するようにしましょう。

○発生後の対策

- 1) 輪作の維持：ウイルスは土壌中に 10 年以上維持するため、発生していない圃場でも、輪作を守ることが最大の防除となります。また、積極的に緑肥（イネ科以外）の作付けを行いましょう。
- 2) 排水対策：病原ウイルスは水によって移動するため、滞水しないよう、心土破碎など排水対策に努めましょう。
- 3) 機械の洗浄：病土が唯一の伝染源です。作業を行う際は、発病した圃場を最後にして、伝染源を無病畑に持ち込まないようにし、作業後は、機械に付着した土を必ず綺麗に洗い流しましょう。また、作業受委託や機械の共同利用されている方は発生圃場からの持ち込みに十分注意が必要です。
- 4) 収穫方法：発病部分では品質が低下するので、可能な限り別に収穫しましょう。

JA みねのぶ 営農販売課

TEL : 0126-67-2334